

本気で地球の未来に責任もって

陳述書

原告 利光裕子

私は原発に関しては、30年以上前から反対でした。そもそも、悪魔の原爆の元であるウランやプルトニウムが平和利用できるという話にうさん臭さを感じていました。そして何より、火山国、地震国であるという前に、被爆国であるこの国で、それを使うことに酷い嫌悪感をもっておりました。

それを正当化するように、あの震災が起こる前も電力会社の杜撰な管理や隠ぺいなどで、これまで数えきれないほど、原発の危うさを暗示させる事故が新聞の一面に載せられてきました。けれどいつもその時だけで、一向に脱原発への道は定まらず、あの大地震の日を迎えてしまったのです。

でもこの国の人々のいつもの想像力の欠如で、その恐怖も容易に風化していきます。被爆国と言っても苦しみを体験したのは被爆者だけで、我がことにはならず、今回の福島の大惨事も、私たちはテレビで見ただけで、自分の心の中では体験できていないのです。まるでよその国の出来事のように他人事なのです。明日は我が身だとはどうしても想像できない。

だから「もうそろそろいいだろう」と次々と再稼働されていく。それに対して国民は何の声もあげない。

伊方原発が活断層の上にあることも、20年以上前に知り、絶望的になりました。

「安全だ。大丈夫だ。」と言われても、相手は生きている「地球」の話なのです。地中の奥深

くでマグマが猛り狂っている「地球」の話なのです。小さな人間が相手にできるスケールではないのです。

「何かがあるまでは安全です」ということなのでしょう。何かがあっても誰も責任を取らなくてもいいのがこの国のずっと前からの体質ですから、電力会社やその政策を進めた政府やそれを容認する裁判所だけが安全なのでしょう。

原発は人間の手には負えないという危険性はもちろん、維持コストの問題、ごみの問題など、リスクだけを国民に押し付けるものでしかありません。

もう、そろそろ、私達人類は新しい段階に進もうではありませんか。殺戮のための核兵器から、平和利用という欺瞞の原発から脱して、美しい地球が協力してくれるエネルギーを旗印に、地球上に住む全ての命と共存できるエネルギーに向かって、本気で舵を切ろうではありませんか。本当はすぐそこまでそんな日は来ているはずです。

でも、もし、明日にでも巨大地震や、原発の上に爆弾でも落とされれば、一夜にしてすべてが崩れ去ってしまいます。それも何世紀先の未来まで……。

残されている時間はもうないのです。

裁判官の皆さんも、本気で地球の未来に責任をもって判断してください。

瀬戸内海の水産業を守るために

陳述書

原告 日高俊次

私は大学で水産学を専攻し、33年間地方公務員として水産業に携わってまいりました。伊方原発が事故を起こした場合、私たちの市民生活に甚大な被害をもたらすことから、事故を起こす前に一日も早く停止してほしいと思い原告になりました。この陳述書では、水産業に関わってきた立場から私の思うことを書かせていただきます。

原子力発電所は、温排水を大量に海に流し、周辺の漁場に影響を及ぼします。これは他の火

力発電所でも同じことと言えます。しかし原発はひとたび事故を起こせば、福島第一原発事故でわかるように、火力発電所などとは次元の違う甚大な被害をもたらします。

福島県沖では事故から7年以上たった今もなお、底引き網漁業など沿岸漁業の操業自粛が続いています。また遠く離れた東北や関東の湖やダム湖でも放射能の影響でヤマメやアユ、ウナギなどの出荷制限が続いています。原発の事故がいかに水産業に甚大な悪影響を及ぼすのか、

そしていかに長期に及ぶ恐ろしい事態であるのか改めて実感しています。

しかし、瀬戸内海に面した伊方原発で同様の事故が起きたら、福島とは比較にならない致命的な被害を水産業に及ぼすことが予測されます。

まず、福島の海は開放的である上に、日本海流と千島海流がぶつかる海域にあるために、東の太平洋側にどんどん海流が流れていく環境にあります。ですから福島の海に流れ出た放射能は沖合にどんどん拡散され薄められていったのです。しかしそれでも、今なお資源操業などで漁獲された魚から時折放射性セシウムが検出され、沿岸漁業などの操業自粛が解除されていません。

また、空气中に放出された放射性物質は偏西風の影響で通常東の海上へ流されるのですが、事故直後の3月15日ごろ、わずかに1回風向きが変わり、陸域に放射性物質が降り注ぎました。このわずかに一回の風向きの変化が主因となって、福島の多くの方が今も避難を余儀なくされている大災害をもたらしたのですが、その後東北や関東に拡散した放射性物質は更に広域を汚染し、遠く離れた東京都でさえ河口の泥や下水処理場の活性汚泥から放射能が検出されたりして問題になりました。

その後福島以外では陸上の放射能汚染はあまり問題にされなくなりましたが、湖やダム湖では今なお淡水魚から放射性物質が検出され、なかなか終息の兆しはありません。それは、一般の河川と違って湖やダム湖は閉鎖的な水域であり、放射性物質がたまりやすいためです。

さて、伊方原発のある瀬戸内海は黒潮などの海流の影響を直接受けるわけでもなく、潮の満ち引きで少しずつ海水が入れ替わるような、実に閉鎖的な水域です。伊方原発に福島第一原発のような過酷事故が起きた場合、海に流れ出た放射性物質はほとんどが瀬戸内海にとどまり、海底に沈み、食物連鎖を通じて瀬戸内海の生物を汚染し続けることとなります。また、大気中に放出された放射性物質も主に四国、中国、関西方面に降り注ぎ、雨で川に流されて最後は多くが海に流れ込み瀬戸内海を汚染するのです。

ごく一部が陸域に降り注いだ福島の事故とは違って、伊方原発の場合は放出された放射性物質の大部分が瀬戸内海や周辺の陸域に降り注ぎます。そして水産業に対しては想像するのも恐ろしいような壊滅的な打撃を与えることとなります。

私の住む大分市は「関あじ・関さば」の産地で

す。また、近くの日出町では「城下がれい」が有名です。これ以外にも瀬戸内海に面する大分県では実に多彩な水産物が漁獲されて、漁業者の生活があり、地域の豊かな食文化があります。さらに、瀬戸内海の各県にもそれぞれに美味しい水産物があり、漁業者の暮らしがあり、それぞれの食文化があります。

しかし、万が一伊方原発で福島のような過酷事故が起きたら、恐らく瀬戸内海全域で福島県沖のように操業が禁止され、漁業者は生活の糧を奪われてしまいます。そして閉鎖的な瀬戸内海では湖やダム湖のように汚染はいつまでも続き、半減期が30年もある放射性セシウムに汚染された場合、何百年も深刻な汚染が続く恐れがあります。

仮に、私の住む大分が運良く偏西風のおかげで放射性物質が降り注ぐことなく、住み続けることができたとしても、「関あじ・関さば」をはじめとして大分のすべての水産物は食べることができなくなります。漁業者の生活は奪われ、佐賀関伝統の一本釣り漁業をはじめとする沿岸漁業はすべて途絶え、海の幸に恵まれてきた大分の食文化も途絶え、そして二度と復活できないことは、まず間違いありません。

また、瀬戸内海の各県でも、福島のように住宅地の除染作業が行われ、何十年か後に再び住むようになれたとしても、瀬戸内海では汚染が続いたままで水産物は食用にできず、多くの地域で漁業が消滅してしまっている可能性が大きいと思います。

福島第一原発の事故でこのような事態が現実になりうるということが十分に立証されました。

原子力規制委員会は「原発事故は絶対に起きないとは言えない」と、公言しています。不測の事態で事故は起きないとは限らないわけですし、ましてやすぐそばに中央構造線断層帯が通っている伊方原発では、地震などの自然災害のリスクは他の原発より格段に高いと思います。

電力は原発以外の火力や再生可能エネルギーでいくらでも作ることができます。原発でなければ絶対にダメだという理由はどこにもありません。事故が起きれば破滅的な結果しかもたらさない原発は一日も早く停止してほしいと、切実に願う次第です。

